

複雑な構造を持つ日本語音声言語の基本的観察

A Basic Study of Spoken Japanese with Complex Structure

定延 利之[†]
Toshiyuki Sadanobu

[†]神戸大学
Kobe University
sadanobu@kobe-u.ac.jp

Abstract

Written and spoken languages have traditionally been thought as distinguished from each other simply by the medium used. But at the same time it has been also pointed out that this distinction sometimes overlaps with stylistic distinction. More recently the innovative idea that they should be distinguished synthetically using various viewpoints has become widespread (Chafe 1982; Tannen 1980, 1982). According to this idea, written and spoken languages are best delineated using various interrelated parameters including structure, strategy, and content besides medium as a matter of degree on a continuum. Prototypical written language conveys general knowledge to distant receivers by a complex and dense text structure, whereas prototypical spoken language, consisting of a simple and fragmented structure of sound, fits well with conveying personal experiences in on-line multi-modal interaction. Quite contrary to this common idea (structural aspect, inter alia), Modern Japanese spoken language often has complex structures. We shall observe these previously unrevealed structures ('musical languages') from grammatical point of view and describe five fundamental processes that construct these structures.

Keywords — Spoken Language, music, grammar, Japanese

1. はじめに

「文字言語の構造は複雑。音声言語の構造は断片的」という通説は、人間の情報処理の観点から説明されてきた。たとえばチェイフによれば

(Chafe 1982), 「文字を読む速さ」は「文字を書く速さ」を遥かに凌駕するので書き手は読み手とは同じ場に共在せず、書き手は自分だけの場所で、自分の時間を存分に使って推敲する結果、文字言語は構造が複雑になりがちである。これと対照的に「音声を聞く速さ」は「音声を話す速さ」への同調が容易なので、話し手は聞き手と同じ場に共在し、聞き手の反応を見ながら事前の準備なく即

時的に話す結果、音声言語の構造は断片的になりがちである。

管見の限りこれまでに指摘されていないが、この通説に反する、複雑な構造を持った音声言語が少なくとも日本語には存在する。これは音声言語が、文字言語・音声言語に共通する「狭義の言語」(チェイフやタネン (Tannen 1980; 1982) が論じたのはこれである)と、「音楽」にまたがる総合的な運動であることを示唆する。以上の認識に基づき、本発表は複雑な構造を持った音声言語を「音楽的言語」と仮称し、そのあり方について文法的な観点から基本的な観察を行い、音楽的言語を構成する5つの行動を素描しようとするものである。

2. 第1の行動「複合語を形成する2連」

単一語基を2つ連続させたり、互いに類似する語基どうしを2つ連続させたりすると、生起環境が語基1つだけの場合とはズレることがある。これは、「2つ連続させる」という行動が、独自の文法的性質を備えた構造体を生み出すということである。ここで「複合語を形成する2連」と仮称する行動は、そのような行動のうち、特に複合語(自立語+自立語)を作り出すものを指している。説明の都合上、まず、オノマトペの2連を取り上げ、次にそれ以外の語基の2連を取り上げる。

2.1. 複合語を形成するオノマトペの2連

たとえば「　、乾いた音が響いた」の下線部には「カチ」「カチン」「コチン」いずれも入るように、「カチ」「カチン」「コチン」は自立語として不自然ではない。だが、「??カチだ」「??カチする」「??カチンになる」「??コチンの状態」は不自然である

(冒頭の「??」印はこの不自然さ(文法性の低さ)を表すものとする。以下も同様)。ところが、これらを2連すると、「カチカチだ」「カチカチする」「カチンコチンになる」「カチンコチンの状態」のように不自然さが解消される。このように、単一のオノマトペや互いに類似するオノマトペどうしを2つ連続させてできる複合語は、独自の生起環境を備えている。この複合語を以下では「2連オノマトペ」と仮称し、2連オノマトペを形成する行動(複合語を形成するオノマトペの2連)を観察する。

2連オノマトペは、長さによって、生起環境つまり品詞が異なり、それに対応してアクセントも異なる。それをまとめると次の(1)のようになる。

(1) 2連オノマトペの品詞とアクセントの対応

a. 長さ2フットの場合:

形容名詞や名詞なら平板型。

サ変動詞語幹や状況副詞なら頭高型。

b. 長さ3フットの場合:

形容名詞や名詞で平板型。

c. 長さ4フットの場合:

形容名詞や名詞で平板型。

以下、(1)の内容を詳しく述べる。

まず、(1a)について。長さ2フットの2連オノマトペは(例「ぐちゃぐちゃ」「カサカサ」)、品詞が形容名詞や名詞なら(つまり「__だ」「__な状態」「__の状態」「__になる」などの環境に生起するなら)、アクセントは無核つまり平板型という、一般の複合語には無い型になる。(一見反例と思える平板型の語「非常識」「日本的」「風邪気味」などは、「非-」「-的」「-気味」が自立語でないため複合語(自立語+自立語)でなく、反例にならないことに注意されたい。)他方、サ変動詞語幹である(つまり「__する」などの環境に生起する)場合や、状況副詞である(つまり「さっきから__うるさいよ」などの環境に生起する)場合は、アクセントは一般の複合語と同じく有核であるが、有核といっても頭高型で(「ぐ' ちゃぐちゃ」「カ'

サカサ」)、やはり一般の合成語とは異なる。(一見反例と思える少数の頭高型の語「法隆寺」「延暦寺」「金閣寺」などは、「-寺(じ)」が自立語でないため複合語でなく、反例にならない。)形容名詞・名詞専用の語や(例「ズタズタ」)、サ変動詞語幹・状況副詞専用の語についても(例「ド' ンドン」)、アクセントはいま述べたとおりである。

(なお、本発表の「状況副詞」は、他を直接修飾しない副詞を広く指すものとする。たとえば「__言うんじゃない」の下線部に入る2連オノマトペ「ぐ' ちゃぐちゃ」は必要度が高く(「??言うんじゃない」では不自然)、述語(「言う」)の目的語にやや近いが、これも本稿では状況副詞としておく。)

次に、(1b)について。長さ3フットの2連オノマトペは(例「クリンクリン」)、2フットの2連オノマトペ(「クリクリ」)と特殊モーラ(「ン」)で構成されている。(一見反例と思える「ちゃらんぼらん」などは、語数が少ない上に、そもそも要素(たとえば「ちゃらん」)が自立語でないため複合語でなく、反例にならない。)品詞が形容名詞や名詞の場合、アクセントは無核で(「クリンクリンな感じ」「クリンクリンの状態」)、これは2フットの2連オノマトペと同じである。品詞がサ変動詞語幹や状況副詞の場合は、実はそもそも有るか無いかの判断が難しく、つまり1つの複合語(2連オノマトペ「クリンクリン」)が形成されているのか、自立語(「クリン」)が2つ連続しており複合語を形成してはいないのかが微妙である。アクセントは一般の3モーラ+3モーラの複合語(例「パインワ' イン」)と同じく有核で中高型(「(髪の毛がなんか)クリ' ンクリン(してる)」「(さっきから)パコ' ンパコン(うるさいよ)」)とも思えるが、本発表では、複合語ではなく、自立語(「クリン」「パコン」)の2連続(後述「句を形成する2連」)と考える。その根拠の第1点は、複合語と考えると、一般の3モーラ+3モーラの複合語がアクセント核を後部要素に置くのと違って(例「パ' イン」+「ワ' イン」で「パインワ' イン」)、アクセント核が常に前部要素に置かれるように見

えるのが説明困難だということである。根拠の第2点は、特殊モーラもしばしば核を担うように見えるのが説明困難だということである（「(髪の毛がなんか) クリ'ンクリン(してる)」）。形容名詞・名詞専用の2連オノマトペや(例「ぐでんぐでん」), サ変動詞語幹・状況副詞専用の2連オノマトペについても(例「(中でなにか) カランコロ(鳴ってる)」), 同様である。

最後に、(1c)について、長さ4フットの2連オノマトペも(例「かっちゃんかっちゃん」), 2フットの2連オノマトペ(「かちかち」)と特殊モーラ(「っ」「ん」)で構成されている。(一見反例と思える「ちんぷんか'んぷん」「しっちゃんかめ'っちゃんか」「ずんぐりむ'っくり」などは、要素(たとえば「ちんぷん」)が自立語でないため複合語でなく、反例にならない。)品詞が形容名詞や名詞の場合、アクセントは無核で(「かっちゃんかっちゃんな感じ」「かっちゃんかっちゃんの状態」), これは2フットの2連オノマトペと同じである。品詞がサ変動詞語幹や状況副詞の場合は、前述(1b)と同じで判断が難しいが、ここでも、自立語(「かっちゃん」)が2つ連続しており、複合語(2連オノマトペ)が形成されていないと考える。

2.2. 複合語を形成するその他の2連

複合語を形成する2連は、オノマトペの2連だけではない。その他の2連によっても、形容名詞・名詞・様態副詞が作り出されることがあるが(例「おもしろ'もい(の意見)」「いたしか'ゆし(だ)」「み'るみる(大きくなる)」「かえすが'えす(口惜しい)」), 散発的で生産性に欠ける。その中で多少とも生産的なものとしては、サ変動詞語幹がある。たとえば「なんだか__した感じ」の下線部には、「こどもこ'ども」「ぼっちゃんぼ'っちゃん」「おんなお'んな」などが入る。

2.3. まとめ

以上の観察を語の品詞の観点からまとめると(2)の表が得られる。(表中、「+」印はよく生み出すことを、「-」印はあまり・全く生み出さないことを示す。以下も同様。)

(2)「複合語を形成する2連」が生み出す語の品詞

	形容名詞・名詞	サ変動詞語幹	状況副詞
オノマトペの2連	+	+	+
その他の2連	-	+	-

本発表の判断によれば、語基の2連は、その結果の長さが3フット以上であり、語種がオノマトペであり、品詞がサ変動詞語幹や状況副詞である場合は複合語ではなく句を生み出し、その他の場合にかぎって語を生み出す。これは、韻律の観察をする中で語の認定をしようとする時、語種(オノマトペか否か)・長さ(3フット以上か否か)・品詞(サ変動詞語幹や状況副詞か否か)の考慮が必要ということである。

3. 第2の行動「句を形成する2連」

単一語を2つ連続させたり、互いに類似する語どうしを2つ連続させたりすると、元の語1つだけの場合には無い、独自の文法的性質を備えた構造体が生み出される場合がある。たとえば、「さっきから__うるさいよ」「__言うな」の下線部に、「ぼっちゃん」は入らないが「ぼ'っちゃんぼ'っちゃん」は入る、というのがそれにあたる。この場合、「複合語を形成する2連」とは違って、要素のアクセント型は変更されず、但し第1語よりも第2語が低く弱い形で連なる。以下ではこのような構造体を作り出す行動を「句を形成する2連」と仮称し、その特徴を観察するが、あらかじめ観察結果を、前節の「複合語を形成する2連」と併せて(3)の表にまとめておく。以下、(3)の表に沿って、「句を形成する2連」の品詞上の特徴を3点述べる。

第1点、形容名詞・名詞の語句を生み出すか否かについて。「句を形成する2連」は「複合語を形成する2連」とは異なり、2連を構成する要素がオノマトペであっても形容名詞・名詞の語句を生み出さない(例「??ぐちゃぐちゃぐち

やぐちやの状態」「??ぐちやぐちやぐちやぐちやな感じ」).

(3)「複合語を形成する2連」「句を形成する2連」が生み出す語句の品詞(上2行が「複合語を形成する2連」,下2行が「句を形成する2連」)

	形容名 詞・名詞	サ変動詞 語幹	状況副詞
オノマト ペの2連	+	+	+
その他の 2連	-	+	-
オノマト ペの2連	-	+	+
その他の 2連	-	+	+

第2点, サ変動詞語幹を生み出すか否かについて. 先の(1b,c)の箇所で述べたとおり, オノマトペの2連という行動は, 長さ3フット以上なら(「髪の毛がなんか)クリンクリン(してる)」「(火の用心と)かっち'んかっち'ん(して見回る)」「(あのあたりは)けっこう)ぐ'ちゃぐちやぐ'ちゃぐちや(してるね)」, 「句を形成する2連」である. オノマトペでないものの2連については, 複合語が一般的であるため判断が難しいが, ここでは句も存在すると判断している. その根拠は, もし複合語であれば後部要素にアクセント核が置かれる(例「くるまく'るましてる)」と予想されるものが必ずしもそう発音されない(最初の「くるま」を高く, 次の「くるま」を低く発音されることもある)と思えることである(インターネットからの実例を(4)に挙げる).

(4)a. ピカソってホントくるまくるましてるんだなと他の車に乗って比較すると思います.

[<http://minkara.carview.co.jp/userid/428372/>

blog/14287909/, 最終確認日: 2012年9月21日.]

b. 雰囲気は秘密秘密してるね~(/- ;

[<http://elcrest.takara-bune.net/replay/tohou03.html>, 最終確認日: 2012年9月21日.]

c. 契約社員とはいえ, こういう会社社してる会社(?)に入るのは人生初のことだから, 尚更.

[<http://blog.livedoor.jp/tabibai/archives/65226488.html>, 最終確認日: 2012年9月21日.]

第3点, 状況副詞を生み出すか否かに関して. 「句を形成する2連」は, オノマトペの2連でなくても状況副詞を生み出すという点で, 「複合語を形成する2連」とは異なっている. 「複合語を形成する2連」の場合, 状況副詞を生み出すのはオノマトペ(例「さつきからぐ'ちゃぐちやうるさいよ」)のみで, たとえば「ぼっちゃん」を2連した「ぼっちゃんぼ'っちゃん」はサ変動詞語幹にしかない. 他方, 「句を形成する2連」は, 2連を構成する語の品詞や語種を問わず, 状況副詞を生み出す. ふたこと目には同じこと(御曹司/祖父母/テスト/経費/暑さ/辞職)を持ち出す相手に辟易して言い返す発言「さつきから__うるさいよ」の下線部には, 「ぼ'っちゃんぼ'っちゃん」「じ'いちゃんぼ'あちゃん」「テ'ストテ'スト」「かねかね」「あつ'いあつ'い」「辞職辞職」「辞める辞める」「辞める辞める」「ぐ'ちゃぐちやぐ'ちゃぐちや」など, さまざまな「句を形成する2連」を入れることができる.

上に見たように, 「句を形成する2連」が「2連」の対象とする語基には, 和語「かね」や2フットのオノマトペ「ぐ'ちゃぐちや」が含まれる. その一方で, 1フットのオノマトペ「ぐちや」は含まれない. というのは, 「__する」「__うるさいよ」などの環境に生起する「ぐちやぐちや」は頭高型アクセントを持つからである. つまり語基の範囲には語種や語長が関わっている.

4. 第3の行動「句を形成する複数連」

ここで言う「句を形成する複数連」とは、語基を2つにかぎらず、複数個連続させて句を作る行動を指している。この場合、語基を連続させることで、新たな品詞が獲得されるわけではないが、どのような語基でも何回でも連続させることが自然というわけではない以上、これも1つの行動として記述する必要がある。この行動は韻律面では、複合語や句の韻律を変えず、平坦調もしくはなだらかな自然下降調、あるいは上昇調でつなげていくことにあたり、上昇は特に嘆きや悲嘆のきもちで発せられる(定延 2005a,b の【低い山, 高い山】)。

「句を形成する複数連」にとって、「句を形成する2連」は一つの特異形ということになる。そして、ここにも、オノマトペか否かという語基の語種の違いが関わり、さらに韻律が関わる。あらかじめ、観察結果を(5)にまとめておく。

- (5)a. 語基がオノマトペの場合：行われ得るのは「句を形成する複数連」のみ。
- b. 語基がその他の場合(平坦調・下降調)：「句を形成する2連」も「句を形成する複数連」も行われ得る。「句を形成する複数連」が行われ得るのは、「句を形成する2連」が行われた場合に限る。
- c. 語基がその他の場合(上昇調)：「句を形成する2連」も「句を形成する複数連」も行われ得る。「句を形成する複数連」が行われ得るのは、「句を形成する2連」が行われた場合が多い。

以下、(5)を順に詳しく見ていく。

まず(5a), 語基がオノマトペの場合。この場合、前節の段階で考えられていた「句を形成する2連」は「句を形成する複数連」に置き換えられる。前節では、「句を形成する2連」がオノマトペに対して行われるとサ変動詞語幹や状況副詞の句を生み出すと述べて、「(あのあたりはけっこう)ぐ' ちゃぐちゃぐ' ちゃぐちゃ(してるね)」「(さっきから)ぐ' ちゃぐちゃぐ' ちゃぐちゃ(うるさいよ)」

などの例を挙げたが、これらは実は「句を形成する2連」によるものではなく、「句を形成する複数連」によるものと考えられる。というのは、「句を形成する2連」からは想定できない奇数連(3連を例に挙げると「(あのあたりはけっこう)ぐ' ちゃぐちゃぐ' ちゃぐ' ちゃぐちゃぐ' ちゃ(してるね)」「(さっきから)ぐ' ちゃぐちゃぐ' ちゃぐ' ちゃぐ' ちゃ(うるさいよ)」)が自然だからである。そして、これら奇数連の自然さを説明するために「句を形成する複数連」を認めると、もはやオノマトペの語基に対して「句を形成する2連」を認める必要は(少なくとも現段階では)見当たらない。

次に(5b), 語基がオノマトペ以外で、平坦調・下降調の場合。この場合は(5a)の場合とは違って、「句を形成する2連」をも認める必要が有る。その根拠は、奇数連が相対的にせよ不自然ということで(3連を例に挙げると「??くるまくるまくるましてる」「??さっきからぼっちゃんぼっちゃんぼっちゃんうるさいよ」), このことは「句を形成する2連」無しには説明できない。さらに、「句を形成する複数連」も、「句を形成する2連」に(「先行」させてしまうと奇数連の不自然さが説明できないので)「後続」する行動として、認める必要がある。というのは、2連に限らず、「句を形成する2連」の韻律どおり、奇数個目の語基を直後の偶数個目の語基よりも高く強く発する)偶数連一般が、もちろん個数が多くなるほど実際に発せられることは少なくなるが、可能と考えられるからである(4連を例に挙げると「金金金金してる」「さっきからぼっちゃんぼっちゃんぼっちゃんぼっちゃんうるさいよ」)。インターネットから実例を(6)に挙げる。

- (6)a. そのため、1月一杯の日記は、金金金金した内容になりますので、このブログを定期的に見ている方がいましたら、ひと月休んで、2月から来られた方が良いと思います。

[<http://betuburo.blog134.fc2.com/blog-date-2>]

0120117.html, 最終確認日: 2012年9月21日.]

- b. そんな感じで全体的になんか女々女々してて... ∴ こわかった

[http://52.xmbs.jp/ZOOsee-4036-d_res.php?n=1691316&view=1&page=d&guid=on, 最終確認日: 2012年9月21日.]

このうち(6b)の表記「女々女々」は、「女」の4連が2連の固まりでできているという意識の現れと言えらる。

最後に(5c), 語基がオノマトペ以外で, 上昇調の場合. この場合も, 「句を形成する2連」は「句を形成する複数連」と同様, 認める必要があるが, その必要性は平坦調や下降調の場合と比べると低い. 具体的に言うと上昇調の場合, 状況副詞句の4連以上の偶数連は(例「(女房が) やめとけやめとけやめとけやめとけ(言うんだ)」)は, 「句を形成する2連」に沿って奇数個目の語基を高く, 偶数個目の語基を低くした上で, その2連セットを徐々に高くしていく発音が最も自然だが, 「句を形成する2連」に沿わず単純に語基を徐々に高くしていく発音も或る程度自然であり, また状況副詞句の奇数連も(例「(女房が) やめとけやめとけやめとけ(言うんだ)」), 或る程度自然である. つまり上昇調の「句を形成する複数連」は, 基本的には「句を形成する2連」に続けて行われるが, 必ず「句を形成する2連」を経なければならないというわけではない. なお, 状況副詞と比べてサ変動詞語幹の場合は上昇調はやや想像しにくい, 4連以上の偶数連について(例「ったく, ぼ' っちゃんぼ' っちゃんぼ' っちゃんぼ' っちゃんしやがって」), そして奇数連について(例「ったく, ぼ' っちゃんぼ' っちゃんぼ' っちゃんしやがって」), 状況副詞の場合と同様のことが言えるので, 状況副詞に準じて考えておく.

5. 第4の行動「名詞句を形成する句の複数連」

前節で取り上げた「句を形成する複数連」では, 語基を連続させることで新たな品詞が得られない.

だが, これは, 語基を連続させて句を形成する行動の全般に当てはまるものではなく, 中には, 新たな品詞を得るものもある. たとえば話題の人物がしきりに恐怖を訴えていた3時間を「こわい, こわいの3時間(が過ぎるとケロツとしている)」のように, 本来は名詞的な性質を持たず, 「_の3時間」という環境に生起しないはずの形容詞句「こわい」を複数個連続させ, これに何らかの「まとまり」を付けることによって, 名詞的な性質を獲得させるという行動がそれにあたる. この場合, 形成される句は名詞句に限られるので, この行動を「名詞句を形成する句の複数連」と仮称して, 「句を形成する複数連」とは区別しておく.

「名詞句を形成する句の複数連」は, いまの例のように同一の句(「こわい」)を複数個連続させる場合もあるが, 多くの場合は, 「一か, 八かの勝負」「のるか, そるかの決断」「清く, 正しく, 美しくの精神」のように, 互いに類似する句(「一か」と「八か」, 「のるか」と「そるか」, 「清く」と「正しく」と「美しく」)どうしを連続させる行動である. これらは既に固定化した言い回しになっているが, 「何しろあそこは寒い, 暗い, 貧しいの地方だから」のように, 新たなものを作ることもできる.

句どうしの「類似性」や上記した「まとまり」は, 形式面に要求されることがあり(例「??本を読んだりの2時間」「??昼寝をするやらの2時間」は不自然だが「本を読んだり昼寝をしたりの2時間」「本を読むやら昼寝をするやらの2時間」は自然, しかし「??本を読んだり昼寝をするやらの2時間」は不自然), これは伝統的には構文(「～したり…したり」「～するやら…するやら」)と考えられてきたものである. だがその一方で, 「類似性」や「まとまり」が意味的に見出されさえすれば, 形式(活用形や品詞)の面では特に要求されないように見える場合もある(例「??食えの命令」は不自然だが「食え食わないの言い合い」は自然. 「??必要だの意見」「??金が無いの意見」「??諦めるの意見」は不自然だが「必要だ, 金が無い, 諦めるの堂々巡り」は自然). どのような場合にどう

いう（意味的～形式的）「類似性」や「まとまり」が必要で、どういう構文をなぜ認める必要があるのかは未解明の部分が多く残している。本発表では「名詞句を形成する句の複数連」という行動の存在を指摘するにとどめ、この点の探求は今後の課題としたい。

6. 第5の行動「歌」を形成する2フットの偶数連

以上では、言語の文法性に「2連」や「偶数連」という行動が影響することを観察したが、それらの行動は、発話（「ぐちゃぐちゃうるさい」）の一部（「ぐちゃぐちゃ」）にだけ、局所的に見られるものである。これらとは異なり、発話の全体に及ぶ「偶数連」を最後に観察する。偶数連とは言っても、偶数個連続させるのは、これまでのような語基ではなく、2フットの枠組みである。発話をその枠組みに合わせていくと（但し最終の2フットには1モーラしか入らず、残り3モーラは休止である）、音楽的な「すわりの良さ」（あるいは「語調」）が生まれる。以下、この偶数連を「歌」を形成する2フットの偶数連」と仮称する。

「歌」を形成する2フットの偶数連」は、いかにも「歌」らしい発話にも観察できる（例「かっとーば／せー／たーなー／か」は2フットの4連（但し末尾3モーラは休止。以下略）。「ふるいけ／やー／かわずー／とびこむ／みずのお／と」は2フットの6連。「かっとーば／せー／たーなー／か／きょーじんーを／たーおー／せー／おー」は2フットの8連）。だが、特に「歌」らしさを感じさせない、一般の「狭義の言語」のすわりの良さにも、実は「歌」を形成する2フットの偶数連」が関与している。たとえば、2フット「わかった」の直後には終助詞「よ」などが付いて、「わかった／よ」などになってもよいが（2フットの2連）、「わかった」を2つ連続させた「わかったわかった」には終助詞が付かず、「わかった／わかった／よ」（2フットの奇数（3）連）は不自然である。ところが「わかった」を3つ連続させた「わかった／わかった／わかった／よ」（2フットの4連）

は再び自然である。またたとえば、前節冒頭の例「こわい、／こわいの／さんじか／ん」（2フットの4連）を「おそろしい、おそろしいのごふん」に変えたとしても、文法性は保たれるが、すわりは悪くなる。またたとえば、第4節で挙げた「ぐちゃぐちゃ／ぐちゃぐちゃ／うるさい／よ」（2フットの4連）に「ぐちゃぐちゃ」を加えたり（「ぐちゃぐちゃ／ぐちゃぐちゃ／ぐちゃぐちゃ／うるさい／よ」（2フットの5連））、「よ」を除いたりしても（「ぐちゃぐちゃ／ぐちゃぐちゃ／うるさい」（2フットの3連））、文法性は保たれるが、すわりは悪くなる。

前節までで見てきた、文法とリズムの有縁性からすれば（さらに「言語」と「音楽」の情報処理の類似性について Lerdahl and Jackendoff (1996)・Patel (2008)を参照）、文法性が「すわりの良さ」と通底しているとしても意外ではないが、その実態が現状では明らかでない。そのため、本発表では「文法」を発話としての自然さ、「すわりの良さ」を「歌」としての自然さとして両者を区別した上で、後者に関わる行動として「歌」を形成する2フットの偶数連」を指摘した。

謝辞 本発表は、日本学術振興会の科学研究費補助金による挑戦的萌芽研究「複雑な構造を持つ音声言語の語調に関する文法的研究」（課題番号：24652092, 研究代表者：定延利之）の成果の一部である。

参考文献

- [1] Chafe, Wallace L. 1982 "Integration and Involvement in Speaking, Writing, and Oral Literature." In Deborah Tannen (Ed.), pp. 35-53.
- [2] Lerdahl, Fred, and Ray S. Jackendoff. 1996 A Generative Theory of Tonal Music. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- [3] Patel, Aniruddh D. 2008 Music, Language, and the Brain. New York: Oxford University Press.

- [4] 定延利之 2005a 「日本語のイントネーションとアクセントの関係の多様性」『日本語科学』, 第 17 号, 国立国語研究所, pp. 5-25.
- [5] 定延利之 2005b 『ささやく恋人, りきむレポーター—口の中の文化—』岩波書店.
- [6] Tannen, Deborah. 1980 “Spoken/written language and the oral/literate continuum.” Proceedings of the Sixth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, pp. 208-218.
- [7] Tannen, Deborah. 1982 (ed.) Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy. Norwood, NJ.: ABLEX.